

# 「先生のための学校」誌上 開校

学力研 先生のための学校 校長 久保 齋

## 第一講座 「逐語的読解指導」

小学校教育の最大の課題とは何でしょうか。小学校での最大の課題をひと事というならば、「文から情報を得、自分の思いを文で表すことのできる子に育てること」です。

就学前、親の愛情に育まれて話し言葉・聞き言葉を獲得してきた子が、小学校一年生で文字を習いはじめ、小学校を卒業するときには、本を読み、本から学び、文で自分の思いを表わせる子に育っていきます。

言葉をとおしての伝達方法は、音声言語の「話す・聞く」と文字言語の「読み・書く」の二通りしかありません。私たち小学校の教師はたった六年間で、子どもたちを大人と同じ伝達方法と学習方法をもった人間に育てあげているのです。

低学年のとき、とても活発でものしりだつた子が、中学年くらいからさつぱり伸び

ないことがあります。それは、この子が「耳学問・見る学問」のまま止まってしまったからです。知的好奇心は旺盛なのですが、知識獲得の方法をテレビや図鑑などの映像文化に頼り、文字をとおして獲得することを怠ってきたのだといえます。

私たちは、子どもたちの表面上の活発さだけに目を奪われず、その子ができるだけすみやかに、しかも確実に「読み言葉・書き言葉」での学習、すなわち文章の読解による知識の獲得へ移行するように導いてやらなければなりません。

クラスを見てみると、見るからに国語力のない子がいます。このような子には読解の初歩からの指導をもう一度行つてやる必要がありますが、読書が好きなのに読解力がない子という子もいます。そのような子は、文章からイメージを追うのは好きなの

ですが、自分勝手な読みをしています。文を読むことに抵抗がなく、読書を心地よく感じているのとはとてもいいことですが、このような子には、文学教材において自分勝手な読みではなく作者の意に即した正確な読みを指導することで、読書の質を高めてやることと、説明文をしつかり学習させ、理論的思考力を養うことが必要です。

私たち小学校教師は、国語の学習をおしてクラス全体の読解力を高めるだけでなく、子どもたち一人ひとりの弱点を見抜き、その改善の手立てを考えていかなければなりません。

## 教師の設問で“問い直して”

### “読み直しの力をつける”

では、読解力をつけるためには、どのような力が必要なのでしょう。まずは音読する力が必要です。国語の苦手な子は本当によく読み違いをします。間違つた読みからは正しい読解はできないので、ゆっくりでよいので正確な読みの指導が必要です。次に必要なことは、“問い直す力”です。これが読解力の低い子にはついていないのです。

「問い直す力」とはこういうことです。

『野原に黄色の花が三本さいていました。』  
という文を読んで、筆者の言うことがすぐに読み取れなかったら、「野原に何がさいていた？（問い直し）→「花」→「どんな花？（問い直し）」→「黄色」というふう」に、「問い直し」→「読み直し」→「わかる」ということを何度も繰り返して、読解していくのです。

読解力の低い子は、自分が読解できていくのかどうかもわからないのです。だから、「問い直す」ことも「読み直す」こともできず、結果として読解できずにいるのです。

この“問い直し”を教師が小さなステップで、設問として子どもたちに出してやりませう。そうすると、子どもたちは設問に答えようとして、“問い直し”“読み直し”をやりはじめます。こうして、そういうことを何回も何回もくり返すことによって、ようやく自分で“問い直し”“読み直し”のできる子即ち、読解力のある子に育っていくのです。

### 口頭発問を毎日繰り返し返す

読解の初歩指導は毎時間、毎時間くり返さなければ成果を現れません。全体音読の

後の5分間を使って行います。音読したところから教師が一、二問、口頭で発問し、それを子どもたちがノートの欄外に書くという方法で行います。これだけで十分に読解力の初歩をそだてることのできるのです。例えば二年生の「たんぼぼのちえ」の最初では

○ 春になると何がさくのですか。

○ 二、三日たつと花はどうなりますか。

こんな発問でいいのです。子どもたちは「たんぼぼ」とか「くろっぼい色」だとか教科書から見つけてノートの欄外に書くのです。

この読解指導は一年から六年まで全学年の子どもにも有効で、あまり読解の得意でない子をターゲットにしていますが、クラス全員に答えをノートに書かせることで凛々しく行うことが大切です。教師の発問を子どもたちが口頭で口々に答えるような方法では、読解力の低い子の力は絶対につきません。この方法は、一斉授業の中で個別指導を行っているのですから、読解力の乏しい子が教師の発問を使って、「問い直し」→「読み直し」→「答えを書く」という行為をしつかり行っているかを見定めることが大切です。

この指導は「読解力のさかのぼり指導」を授業のはじめ五分を使って行っているものでB、C、D群での成果は大きく表れます。

### 国語の市販テストで

#### 100点を取らせる技

国語学習の初期における読解を私は《逐語的読解》と名づけて提案しています。《逐語的読解》とは「語に即した読解」「答えが必ず文の中にある読解」ということです。

市販テストは客観性が要求されるので、国語の場合どうしても逐語的読解のテストになつてしまいます。教師ははず、授業で逐語的読解の方法を指導し、その成果として市販テストで100点を取らせ、これでも子どもたちに自信をつけさせて、大いに褒めて国語好きの子どもたちに育てていくのです。

「授業づくりと学級経営の技88」や「一斉授業で子どもが変わる」(教育技術MOOK)など参考に五月は逐語的読解指導に取り組んで読解力の育成でクラスの底上げをはかりましょう。